

Rising Star

声楽

世界に羽ばたく
必要条件

- 1 語学力
- 2 文学的歴史的素養
- 3 演技力

21世紀のホープたち

文モーストリー・クラシック編集部

まず語学。劇場という「プロフェッショナル」な世界は、その言葉の如く、すでに学ぶ場ではなく、仕事の場であり、会話にも大人としての見識が求められる。実際の現場では、指揮者・演出家の指示や意図を理解する語学力が必須なのは当然のことながら、自分の意思を的確に相手に伝える、言葉の積極性も養わなければならない。また、リハーサル時間や内容の変更等、急に電話が来て口頭で伝えられることも

多いので、適切に対応できる会話の能力も大変重要になる。

次に文学的、歴史的素養。オペラの台本になった時点で、モディファイされたりカットされたりしている会話や場面があることも多いので、原作を読んでストーリーを理解する努力をすべきである。最近多くなっている時代設定を読み替えた演出の場合、そのオリジナルの時代背景や、原作のベーシックな知識がないと演出家の意図を理解するのが困難になるのは必定だろう。

そして演技力。役柄の人物像、性格などの分析・研究は勿論、それを体現するための基本的な身体の動き（アレキサンダー・テクニック）の知識を持ち、自分の身体的特徴を把握した上で、いかに活用するかを考えれば、表現の幅は確実に広がる。

「歌をうたう」ほか、これだけのことが最低限必要である。

■

文 中田昌樹
指揮者・新国立劇場オペラ研修所特任講師

ウィーン国立歌劇場専属
世界最高の舞台に登場

中嶋彰子
ソプラノ

世界を熱狂させている、まさに正真正銘のプリマ

“国際的に活躍する日本人ソプラノ歌手”とは、まさに中嶋彰子の代名詞ではないだろうか。現在、ヨーロッパを中心に、その名声を轟かせ、最も注目を集めているプリマ・ドンナだ。中嶋の魅力は、幅広いレパートリーを歌いこなせる天性の美声、卓越したテクニック、そして洗練された演技力。レパートリーはコロラトゥーラからリリコまで、「椿姫」のヴィオレッタ、「ランメルモールのルチア」のルチア、「ラ・ボエーム」のムゼッタ、「魔笛」のパミーナなど。

7~8月にオーストリアのシュタイアでプレミエ公演の「椿姫」のヴィオレッタ、イタリア・トリエステで「ロシア皇太子」のソニヤ、10月にベルリンでリサイタル、11月にモスクワでコンサート。2007年はアムステルダムでのハーグ・レジデンティ管弦楽団とのニューイヤー・コンサート、デンマークのオールフス、コペンハーゲン、スペインのマジョルカなどの各地で、スケジュールがびっしり。

◎三浦興一

バリトン
甲斐栄次郎

2003年9月よりウィーン国立歌劇場専属ソリストとして活躍しているバリトン。「ランメルモールのルチア」のエンリコ、「ラ・ボエーム」のマルチエッロなどの26役で130回以上の舞台に出演している。安定した歌唱力で自身の可能性を最大限に生かし、主役キャストのカバーも数多く務め、レパートリーの幅を着実に広げている。06/07シーズンでは、「ラ・ボエーム」のマルチエッロ、「ロメオとジュリエット」のメルキューシオ、「愛の妙薬」のベルコレ、「ラ・ファヴォリータ」のアルフォンソ11世、「蝶々夫人」のシャープレス、「ドン・カルロ」(仏語5幕版)のロドリゴなど、プリモ・バリトン役での出演が予定され、さらなる期待が高まる。二期会会員。

